カニバリズムからみるヒトの心の進化

鵜澤和宏
東亜大学　総合人間・文化学部　人間動態論研究室
E-mail: kuzawa@po.cc.toua-u.ac.jp

下川昭夫
東亜大学　総合人間・文化学部　臨床心理学研究室
E-mail: akios@po.cc.toua-u.ac.jp

要旨

近年の人類学的調査から、古人類のカニバリズム（cannibalism、食人）の証拠が多く得られるようになり、その動機が飢餓によるものか、何らかの心理的要求が関係しているのか関心が持たれている．この問題の解決には古人類の心理的機制を理解する必要がある。そこで、先史人類学と精神分析学の共同作業に基づくヒトの心の進化を探る新たな研究手法を試みた。その結果、現生人類のカニバリズム行為者の心理には、自己の不安を防衛するために他者と自己との同一化をはかろうとする意図があること、この心理的意味が古人類においても当てはまるかどうか検討するためには、心理的防衛機制の基本的能力である見立ての能力を彼等が備えていたかどうかが焦点となることを指摘した。現在までに得られている考古学的証拠からは、十分な見立ての能力の傍証となる遺物、遺構は3万年前までのものであり、古代型サピエンスと同様、すでに約13万年前に発生していた現生人類にも、その初期には十分な見立て能力を示す証拠が伴わないことが問題となる。今後、この問題を明らかにしていくには、3万年前以前の現生人類が潜在的には持っていたであろう見立て能力を、物的証拠を残す形で開花させ得なかった理由を説明するために、生活環境全般についての詳しい調査が必要である。

1. はじめに

700万年以上にわたる人類の進化は、身体と心の両面において進んできたことは疑いない。しかしヒトの進化を直接に証拠づける資料は、骨や歯などの身体的側面に集中し、心の進化については、脳容量から推測したり、残された石器などの文化遺物から想像したりする以外なかった。ところが近年になって、化石人類の心の進化研究に心理学の知見、方法論を援用しようとする新しい研究領域が提唱されるようになった（Donald 1991）。考古学においても、先史時代人類の行動の背景にある心のあり方を問題とする「認知考古学」が注目を集めるようになり、そのなかで心の進化をたどろうとする試みも見られるようになってきた（ミズン 1998）。ヒトの心を過去にさかのぼって検討しようとする気運が高まっているといえよう。

これまで筆者らは、それぞれ先史人類学、臨床心理学の立場から、ヒトの行動、心の解明に取り組んできた。しかし等しくヒトを研究対象としながら、各々の研究分野の知見が有機的に結びつくことはなかった。小稿は、先史人類学と臨床心理学という異なる研究領域から、ひとつの人類行動をめぐって知見を交え、ヒトの心

東亜大学　総合人間・文化学部『総合人間科学』，第3巻，2003年3月，pp. 75-84

と行動の理解を深めようとする試みである。ここで取上げる行動とは、具体的にはカニバリズム（cannibalism、食人）である。

2. カニバリズムをめぐる議論

ヒトがヒトを食べる行為は共感しにくいため、カニバリズムの話題は非常にショッキングである。しかしながらときに同胞を食べることは、後述するように多くの事例が知られている。また考古学においても、発掘された人骨に刃物によってつけられた切創があることなどから、先史時代に食人が行われたことが指摘されてきた（詳しくは White 1992 を参照)。さらに近年の調査からは、その起源が古代型サピエンス以前にまで遡ることが明らかになっている(Defleur et al. 1999、White 2001)。つまり共感しにくいショッキングな行為が人類史上、かなり長い期間行われてきているのである。この事実に対する受け入れやすい解釈は、飢餓状況下での緊急かつ異常な事態というものである。

ところがカニバリズムの背景には、宗教儀礼と結びついて恒常的に行われていた事例もあり、飢餓への対応とはいいきれない動機が絡んでいることも指摘されている（Duran 1964)。そのため人類学における古人類のカニバリズム研究も、食人が「あったかなかったか」ではなく、「なぜおこなわれたのか」という動機の探索に焦点がある。とはいうものの、過去の人類行動の動機を遺物として残る物質文化の側面から類推することは困難であり、従来の先史人類学的方法論のみでは解決が難しい問題であった。

一方、精神分析学では、その創始者であるフロイトもカニバリズムに言及するなど、その心理的側面を探る研究が以前から行われている(フロイト 1969)。そこで、現代人のカニバリズムの心理的意味を精神分析的に考察した成果を、古人類によるカニバリズムの心理的意味の理解に援用することで、先史人類学的証拠の解釈にどのような可能性が広がるのか、また援用する場合、どのような問題点が考えられるのかを検討することが本稿の主な目的である。

3. 資料と方法

本研究は、(1)先史時代のカニバリズムの事例、(2)カニバリズムの文献記録、および(3)現代のカニバリズム事例を資料とする。まず先史時代のカニバリズムの記録を概観し、その具体的内容を示す。つぎに現代人によるカニバリズムの事例を整理し、その背景にある動機を類型化する。その後、カニバリズムの要因として飢餓以外の心理的欲求に基づく事例を精神分析的に考えることで、その心理機制を理解する。最後に現代人のカニバリズムに示され得る心理的側面を古人類のカニバリズムと対応づけて考えることにする。

しかしながら現代人の心理を、解剖学的に構造の異なる古人類にそのまま敷衍することが果たして妥当かという問題が当然ある。そこで本稿では以下のような方法を用いる。まず精神分析の手法を用いて現代人がおこなうカニバリズムの背景にある心理機制を理解した後、同様の心理機制が動機となる行動を探索する。そして、これらの行動のうち、物的証拠を残し先史人類学的に検出可能と考えられるものを指摘したい。つまり、今後の先史人類学調査において、どのような証拠が得られれば、現生人類と古人類の心理機制は変らないと考えられるのか、またその結果、古人類のカニバリズムに現生人類のカニバリズムの心理的側面を当てはめてよいと考えられるのか検討する。

4. 先史人類のカニバリズム

4.1 人類の肉食傾向の高まり

まず化石人類によるカニバリズムの事例を整理していくが、それに先立って一般に肉食行動がいつごろ始まり、その後の進化にどのように影響を与えたかを概観しておく。

霊長類の食性は一般に植物質食料を中心とする雑食性であるが、ヒトは際立って肉食率が高く、この肉食率の高さが、ヒトがヒトらしい特

徴を備えていくヒト化（Hominization）に影響を与えたと考えられている（Foley 1987）。現在のところヒトの起源は約700万年前のサヘラントロプス（*Sahelanthoropus*）にまで遡るが、積極的な肉食者となるのは260万年前以降のことである（Brunet et al. 2002）．このころ東アフリカでアファール猿人から進化したガルヒ猿人は人類で最初の石器製作者であり、原始的であるが動物の皮膚を切り裂き、肉を取り出すのには充分鋭利な石器を生み出した。ガルヒ猿人とともにみつかるガゼルの骨の化石には石器で切りつけられた痕が確認されており、本格的な肉食がこのころ始まったと考えられる（Asfaw et al. 1999）。この後、ガルヒ猿人からホモ属（*Homo*、ヒト属）の系統が進化するが、ヒト属の進化は、肉食傾向をたかめる道筋であったといっていい。約180万年前にあらわれ、約30万年前までの150万年間にわたってアフロ・ユーラシアに分布したホモ・エレクトス（*Homo erectus*、原人）は、猿人段階では1メートルそこそこだった身長を急速に伸ばし、180cmをこえる高身長のものもあらわれる。また猿人段階ではチンパンジーのように鼻面が突き出た顔つきだったものが、ぐっと現代的にかわってくるなど、現在のヒトの原型はこのころ作られた。こうした変化の要因の一つとして、乏しくなった植物資源をあきらめ、肉食へシフトしていった食糧事情があったと考えられている（Foley1987）。

原人のあとをうけて現れた古代型サピエンス以降、人類は低緯度地域の熱帯から高緯度地域の温帯、寒帯に分布域を拡大していくが、この過程でさらに肉食傾向を高めたと考えられている。ネアンデルタール人が生存していた更新世は気候の寒冷化した氷河期である。現在でも寒冷な高緯度地域に生活する狩猟民は肉食の比率が高いが、約10万年前から3万年前の氷河期に生息したネアンデルタール人も動物性資源への依存度が高かったと推定される。

4.2 カニバリズムの先史人類学的証拠

さてカニバリズムの証拠は人類進化のいずれの段階からみられるのであろうか。現在知られる最古の例はヒトが本格的な肉食者となった原人段階の例である。スペインのアタプエルカから出土した80万年前の化石人骨、*Homo antecesor*の名前が与えられた6個体分、92点の骨には人為的な解体の痕跡が認められる（White 2001）。またエチオピアのボドから出土した約60万年前の原人の頭蓋骨にも肉を切り取られた傷が確認されている（White 1986）。

時代が下り、ネアンデルタール人に代表される古代型サピエンスの時代になるとカニバリズムの証拠も顕著になる。フランスのクラピナ洞窟のネアンデルタール人骨は、破砕され粉々になった状態で見つかり、石器による切創が確認されている（White 2001）。近年、同様の事例が、ドイツやハンガリーなどでも次々にみつかり、ネアンデルタール人がかなり普遍的にカニバリズムをおこなっていたことがわかってきた（White 2001）。こうした、古代型人類のカニバリズムがなぜおこなわれたのであろうか。ヒトの食性に占める肉食の高まりを背景として飢餓状況下で同類の肉を食べたものか、あるいは儀礼的な意味が見出せるのか。以下に精神分析の視点からカニバリズムの心理的側面を検討する。

5. カニバリズムの心理的意味

5.1 現生人類のカニバリズムの類型

カニバリズムの文献記録を検討したマリナーによると、カニバリズムは、(1)宗教祭祀として人肉を食べたもの、(2)必要に迫られてやむをえず人肉を食べたもの、(3)人肉を好きだから食べたもの、(4)経済的理由から人肉を食べたもの、の4つに分類される（マリナー 1993）。以下にマリナーによる分類について事例をあげて概観するが、経済的理由に関しては、第一次世界大戦後の食糧不足のドイツで人を殺してその肉が売られ、顧客は何も知らないうちに人肉を食べさせられていたというもので、食べる側にヒトを食べたという意識がともなわないことから、

本稿ではこのケースを除外して、(1)から (3)までの分類についてみていくことにしよう。また、風習として行われるカニバリズムの背景を生態学的視点から論じたハリスの主張も概観する。

5.1.1 風習としてのカニバリズム

15世紀の中央メキシコのアステカ族は、太陽が毎日必ず天を運行し、人間の繁栄や穀物の実りをもたらしてくれるという宗教観をもち、定期的に人間の生け贄を捧げなければならないと考えていた。その儀式の重要な部分は人の肉を食べることであり、生け贄を捧げる儀式はどの所作も象徴性に富んでおり、正確に行われなくてはならなかったようである。

20世紀初頭、アマゾン川流域で王立地理学会のキーンは、カシボ族は宗教的感情から年老いた親を食べ、ココマ族は死んだ親族を食べ、粉にした骨を飲み物に混ぜて飲むと記載している。冷たい大地に埋めるよりは温かい友人の体内にいる方がよいだろうと考えるためである。

19世紀のフィジーで、宣教師ジャガーの報告によると、バウ族の酋長が犠牲者たちの腕や足を切り、料理して食べた。肉の一部は犠牲者たちにも与えられた。舌を切り落とし、焼いた舌を食べるときは「お前の舌を食べているんだぞ」というあざけりを浴びせたとある。

18世紀にニュージーランドに上陸したキャプテン・クックは原住民が人肉を食べるのを目の当たりにしたという記録がある。また19世紀のマオリ族に関してメイナード博士の記録によると、戦いで未熟だった若い戦士の死体には手をつけず、最も年輩で勇猛だった戦士の肉を食べて自分に同化させることが何より大切だったと考えていたと述べている。

5.1.2 必要に迫られたカニバリズム

1972年10月、ウルグアイ空軍機が試合のためアルゼンチンからチリに向かうアマチュアラグビーチームらを運ぶ途中、アンデス山頂付近に墜落した。乗客45人の内、激突死を免れたのは32人であった。70日後に救援されたが、生存者は16名であった。彼らはカニバリズムによって生き延びることが出来た。

5.1.3 快楽のためのカニバリズム

1981年6月、佐川一政がフランスで同じ講義に出席していたオランダ人女子学生を自宅で殺害後、その肉を食す。日本に送還後、フランス当局が日本の裁判所に一切の書類の提供を拒否したため、松沢病院に護送後1年3ヶ月で退院する。

佐川によると、初めから食べる目的で計画し、詩を朗読してもらい、発砲して殺している(ウィルソン他1995)。4歳の時から食人に対するあこがれを抱いていたが、直前には今決行しないと必ず後悔するという強迫観念にまでなっていた。死体に向き合い、切り裂き、食べている最中もリアリティが乏しく、冷ややかに感じていた。死体をトランクに詰め、ブローニュの森に運んでいって、外の現実に触れて初めて、自分の妄想から目覚めたと述べている。

事件前、この女子学生には恋人がおり、必ずいつか佐川の前から去っていくだろうという気持ちが強かった。「何らかの形で彼女をとどめておきたいという気持ちが強かった。しかしながら、愛を告白する勇気はない。たまたまカニバリズムという妄想が片方にあり、肉片として彼女を自分の体内に入れたということではないか」と本人が語っている。

小学校1年時のカニバリズム欲求を「同性の男の子で、クラスでも一番頭も良くて運動も出来る男の子の太股に目が吸い込まれた。思わずおいしそうだと。自分の肉体にはプルンプルンした動きがどこにもない。そのときどうにも表現出来ないような憧憬、あこがれ、美しい女性を見るときと同じ気持ちになった」と回想している。また「小学校4年生くらいで、性的意識が女性に向かっていくと同時に、おなじ学年の女の子に対してカニバリズムの欲求が生まれてきた」とも回想している。いまでも「美しい女性をみたらおいしそうだと思うが、殺してまでは食べようとは思わない」といっている。しかしながら「ここにお皿に盛ったステーキを差し

出されて、これはこういう魅力的な女性の肉なんですよといわれれば、僕は嬉々として食べるかも知れません」とも話している。

また「母体回帰というか、女性の体の中に入ってしまいたいという、そういう気持ちは確かにあると思います。小さい頃から身近にいた女性は母親だけでしたから、女性に対するあこがれ、女体に対するあこがれは非常に強かったんです。それはずっと続いていましたから、彼女が現れたときやはり一番初めに感じたのは、彼女の中に入っていきたいという願望。彼女を僕の身体に入れるのではなく、その逆だったような気がします」というように、食人の欲求とともに、逆に食べられたいという欲求があることも話している。

5.1.4 ハリスの生態学説

食人がもっとも頻繁に、かつ社会的に体系付けられたなかで行われた例は、上述したアステカ帝国での人身供儀であろう。マリナーの分類に従えば、風習としての（儀礼的）カニバリズムとして分類される。しかし、生態人類学の見地からみると、儀礼を隠れ蓑とした、きわめてエコロジカルな機構が隠されているとする指摘がある。ハリスは、アステカの食人はメソアメリカに食用になる反芻動物家畜が存在しないことと深い関係があると主張する（Harris 1977）。アステカ帝国は、数世紀におよぶ生産強化と慢性的な人口増加の結果、枯渇した生態系のもとにおかれていた。こうした環境下で、ユーラシア大陸に生息するような、人との食料競合を生じない、反芻類家畜を持たないアステカでは、継続的な戦争がもっとも効果的な経済政策であったという。すなわち戦死者によって人口増加にブレーキがかかると同時に、大量に生じる捕虜が、宗教儀礼のかたちをとって家畜と同様に食料として消費できたというのである。

アステカの事例は、慢性的な食料難を食人によって補おうとするものであり、きわめて社会的なものである。この点で、飢えに耐えかねた「緊急避難的」カニバリズムとは一線を画する。また、アステカ帝国での食人儀礼は、慢性的な食糧難への対応としてカニバリズムを食事のメニューに取り込まざるを得ない社会が、根源的なカニバリズムへの禁忌にたいする倫理観への対応策として設けた防御装置であったともいえる。この意味で、カニバリズムの抽象的、精神的な側面が意識されていることに違いはない。

5.2 カニバリズムの動機と進化心理学的意味

以上、先史時代以降、最近までのカニバリズム事例について整理してきた。ここでマリナーの分類を見直し、カニバリズムをもう少し大きな枠組みのもとに2つのタイプにまとめてみたい。第1は、食べる側の身体的なエネルギー要求にもとづいておこなわれるもの、第2に食べる側の心理的な要求にもとづいておこなわれるものである。

この分類に従えば、アンデス山中での飛行機事故の遭難者が行った飢餓状態でのカニバリズムは身体的要求によるもの、佐川がパリでおこなった快楽を求めるカニバリズムは心理的な要求によるものに分けられる。また、風習や儀礼として行われたものは、心理的要求によるものとの分類も可能であるが、アステカ帝国の事例にみるように、身体的要求を宗教によって装飾したものである可能性も否定できない。おそらく、個々の事例によって身体的要求と心理的要求のバランスは多様であるのだろう。カニバリズムの動機には身体的要求と心理的要求のふたつの軸があり、個々のカニバリズム事例はいずれかの要因により、あるいは両者の複合によって行われてきたといえる。

さて、つぎの関心は人類の進化段階と、カニバリズムの動機の対応付けである。身体的要求を動機とするものと、心理的要求を動機とするものが、どの段階で、どれだけの比率で生じているかが問題である。

カニバリズム事例が示すことは、身体的要求にもとづく食人は、人類の進化段階にかかわらず行われ得るということである。原人も、現代人も飢えの緊急避難としてカニバリズムをおこなってきたとみてよい。では、心理的要求にもとづくカニバリズムは存在したのであろうか。

現在までに古代型サピエンス以前のカニバリズムが何らかの儀礼をともなって行われた証拠はみつかっていない。また骨に残された食人の痕跡は、ガゼルやアカシカなどの狩猟動物の骨に観察されるのと同様の形態、分布を示している。このことは、食肉用の動物に対しておこなわれたのと同様の行為がヒトに対しておこなわれたことを示唆しており、儀礼や快楽を目的としたカニバリズムがおこなわれていたことを支持するとはみなし難い。むしろ飢餓対策であったとみるのが合理的である。では古代型サピエンスの段階には心理的要求にもとづくカニバリズムは存在しなかったと結論してよいであろうか。現代人と古人類との認知能力に違いがあることが、充分に予測され得る状況において、カニバリズムに儀礼が伴うかどうかという一点をもって判断することは危険であると考える。カニバリズムの心理的機制の背景についてさらに掘り下げて検討する。

5.3 カニバリズムの精神分析的な意味

5.3.1「食べる」ことの心理学的意味

カニバリズムからいちど離れて「食べる」という行為の心理的意味について考えてみよう。「食べる」という動作はその背景に強い心理的意味を持ち得る行為である。「成功をつかむ」という表現があるが、放してしまえば成功はどこかに逃げてゆく。ところが食べてしまったものは積極的に「吐き出さ」ない限り、自分の身体の一部になるほかないのである。この例だけを考えてみても、「食べる」という言葉のもつ「確実に自分の物にする」という意味の動かしようのない存在感を実感できるであろう。

「食べる」行為をもう少し詳細に検討してみると、歯でかみ砕き・すりつぶすという段階と、飲み込むという段階の2つに分かれていることに気がつく。前の段階は必ずしも必要なものではなく、ただ飲み込むことで「食べる」ことも可能である。この前者の段階に「食べる」ことのもう一つの心理的意味が見て取れる。対象を破壊しつくすという攻撃的な意味である(1)。

このように人を食べるということの行為自体にではなく、心理的意味合いに焦点を当てる方法論が精神分析的な方法論である。この見方は愛情の問題、赤ちゃんの発達段階における心理的意味の問題、など様々なテーマに応用が可能である。そこでは人間を心理的に食べたり吐いたりすることは「同一化」や「投影」と呼ばれる、不安を防衛する手段と考えられている。強い他者に同一化して貧弱な自分を守ったり、嫌な自分を吐き出して人に投影したりすることによって不安から自分を守っているとされている。

精神分析的方法論は、「食べる」行為のように一義的なものではなく、多様な「見方の可能性」を含まざるをえない考え方である。言葉を変えて言うなら、様々な「見立て」が可能である。様々なカニバリズムの本質も人間を食べ物として見るだけではなく、どのように「見立て」るかにあるように思える。食べ物としてしか見ないのであれば、他の食べ物が十分にある場合には食べる必要はなくなる。いくらおいしくても普通は手に入りにくい食材を何が何でも食べようとは思わないであろう。もしそう思うなら、おいしいという他に何かもう1段階特別に「見立てる」必要がある。宗教上の理由にしろ、快楽上の理由にしろ、カニバリズムを行う際には人間を何かもう一段階特別に見立てているのである。

5.3.2 カニバリズムが象徴するもの

「食べる」という行動とその心理的意味合いをこのようにわけた上で、もう一度カニバリズムを考えてみよう。前章でわけた3つのケースではいずれも行動としては、人間を食べている。その動機としてはやむを得なかったり、宗教上の理由であったり、快楽のためであったりする。しかしながら相手を「破壊し尽くし」「確実に自分の物にする」という心理的視点はどこを強調するかの違いがあるにせよ、カニバリズムを行うものすべてがもっている。敵を殲滅する観点からは前者が強調されるであろう

し、やむを得ない場合は後者が強調されるであろう。

佐川の告白からも「何らかの形で彼女をとどめておきたい」といった自分の中に相手を取り込みたいという記述が見られる。また「彼女の中に入っていきたいという願望。彼女を僕の身体に入れるのではなく、その逆だったような気がします」という記述から、食べることによって相手と完全に同一化するイメージが語られている。これは「自分の肉体にはプルンプルンした動きがどこにもないからおいしそうに思えた」という点で「最も年輩で勇猛だった戦死の肉を食べて自分に同化させる」マオリ族の戦士と共通した、自分にない力を相手の力で補いたいという願いである。

カニバリズムは現代人にとって一見、理解しづらい行為であるが、実際に人を食べる面から、その心理的意味という面を分離して考えてみると、非常によく理解できる。例えば、野球少年が意識していないうちに、イチローの癖や歩き方、しゃべり方までそっくりに真似していることがある。この背景にはイチローのもつ力で自分の乏しい力を埋め合わせたいという願いが込められていることは明らかだ。心理的カニバリズムなら誰でも普遍的に行っていることに気づくであろう。

6. 先史人類のカニバリズムの理由 ——何を探索するべきか

前章の考察から、飢餓などのやむを得ない場合以外の現生人類のカニバリズムには、同一化という防衛機制を用いて不安を防衛する心理的意味があることが示唆された。またそのためには相手の何らかの特徴を認め、自分にはない力を持っている特別な存在であると「見立てている」必要があることが考えられた。このことから心理的意味合いの強いカニバリズムでは、その行為者に見立てを行う認知能力の発達が前提となることが示唆された。したがって、古人類のカニバリズムの動機を推測する上で、見立てを行う能力を示す物的証拠が得られるかどうかが重要ということになる。具体的に古人類の物質文化の中に、どのような見立ての例を探すことができるであろうか。

はっきりとそれとわかるのは、壁画や彫像などの原始美術と称される遺構、遺物であろう。壁画に描かれるのは、バッファローやウマをはじめとする、狩猟動物であり、その多くには槍や弓矢が突き刺さる場面が好んで描かれる。また彫像のモチーフには下腹部の大きく膨らんだ女性像が選ばれる。これらは、狩猟の成功、豊穣などを祈願した、呪術的機能が付加されたものとして解釈されている。現実をモノに仮託することはまさに「見立て」といっていい。これらの物質文化はヒトが見立てる抽象的能力を獲得したことを示すものである。

もちろん、こうした議論は現在まで残存した遺物にもとづいたものであり、すでに失われてしまった遺物、木片や獣皮などの有機物が見立ての道具として存在していた可能性は否定できない。さらには何ら加工を受けていない石や木片、骨片が何物かに見立てられていた可能性も考慮しなくてはならない。すなわち後期旧石器時代の原始美術は、見立ての能力が遅くともこの時点までには獲得されたという、上限の年代を示すに過ぎない。古代型サピエンスの段階に、抽象的な見立てをしめす痕跡がないか、遺物の形態だけでなく、そのコンテキストに注意して探索をつづける必要がある。

しかしながら、これらの見立ての能力獲得を示す考古学的証拠は約3万年前以前にさかのぼらず、すべて現生人類が残したものである事実はやはり重視すべきであろう。現段階では現生人類に至ってはじめて飛躍的な見立ての能力を獲得したと考えられるのではないだろうか。そうだとすると、古代型サピエンス以前のカニバリズムには、現生人類で見られる不安からの防衛といった心理的意味は考えにくいことになる。

古代型サピエンスと現生人類の間に、認知能力の飛躍的増大があったとみる解釈は、説得力がある。しかし問題はそう単純ではない。現生人類の発生は約13万年前のことであり、彼等

が美術品と呼べるものを残す約3万年前までには長い時間の間隙がある。解剖学的には、13万年前の現生人類と約3万年前の人類とが、知能の点で異なった能力をもっていたとみなせる証拠はない。初期の現生人類が潜在的に見立て能力を持っていた可能性は十分に考えられるにもかかわらず、それが物的証拠を残すまでに発揮されていない理由をどのように考えたらよいであろうか。この点は、今後の先史人類学の課題であるが、精巧な美術品の製作には、それを可能にする時間、選ばれた材料などの資源、社会的機構が必要とされるであろうことは想像に難くない。約13万年前の初期の現生人類から、原始美術を生み出す後期旧石器時代までの生活環境について具体的な知見を積み上げていくことが求められる。

7. まとめ

本稿ではカニバリズムという現代人にとっては特異であるが、古人類から現生人類まで連綿と行われてきた行為を対象に、精神分析的にその心理的意味を検討した。その結果、現生人類ではカニバリズム行為者がその対象者を特別な存在と見立て、それを食べることで、対象者の存在を行為者の中に取り込み、行為者が感じている不安を防衛する心理的意味を明らかにした。

この心理的意味が古人類においても当てはまるかどうか検討するためには、彼等が心理的防衛機制の基本的能力である見立ての能力を備えていたかどうかが焦点となる。しかしながら、現在までに得られている考古学的証拠からは、十分な見立ての能力の傍証となる遺物、遺構は3万年前までのものである。古代型サピエンスと同様、すでに約13万年前に発生していた現生人類にも、その十分な見立て能力を示す証拠が伴わないことの説明が求められる。

今後、この問題を明らかにしていくには、カニバリズムの証拠を綿密に検討するほか、見立て能力を示すであろう痕跡を丹念に探索していく必要がある。また同時に、3万年前以前の現生人類が潜在的には持っていたであろう見立て能力を、物的証拠を残す形で開花させ得なかった理由を説明するために、生活環境全般についての詳しい調査も必要である。

注

(1) 蛇足だが、「吐き出す」ことにも心理的意味がある。吐き出されたものは自分にとって良くないもの、吸収しきれないものである。汚物を見ると自分のものでも気持ちが悪くなるが、心理的には吐き出された嫌なものは人に投影される。つまり自分がいけ好かないと感じている人の特徴こそが、自分の中から相手に吐き出されたそのものである。逆に言うと、いけ好かない相手の特徴は実は自分の中に薄々感じていた特徴である。自分の中に持ち続けていると気分が悪くなるので、相手に吐きかけてしまっただけである。吐いてしまわずに自分でうまく消化できれば栄養になることは簡単にイメージできるであろう。

引用文献

Asfaw, B., T.D. White, O. Lovejoy, B. Latimer, S. Simpson, and G. Suwa (1999), *Australopithecus garhi*: A new species of early hominid from Ethiopia. *Science*, 284: 629-635.

Brunet, M.,F. Guy, D.Pilbeam, H.T. Mackaye, A. Likius, D. Ahounta, A. Beauvilain, C. Blondel, H. Bocherensk, J.Boisserie, L. Bonis, Y. Coppens, J. Dejax, C. Denys, P. Duringerq,V. Eisenmann, G. Fanone, P. Fronty, D. Geraads, T. Lehmann, F. Lihoreau, A. Louchart, A. Mahamat, G. Merceron, G. Mouchelin, O. Otero, P.P. Campomanes, M. P. De Leon, J. Rage, M. Sapanetkk, M.Schusterq, J. Sudrek, Pascal Tassy, Xavier Valentin, P. Vignaud, L. Viriot, A. Zazzo & C. Zollikofer. (2002) A new hominid from the Upper Miocene of Chad, Central Africa. *Nature*, 418: 145-151.

Defleur, A., White, T., Valensi, P., Slimak, L., and Cregut-Bonnoure, E. (1999), Neanderthal cannibalism at Moula-Guercy, Ardeche, France. *Science*, 286: 128-131.

Donald, M.(1991), *Origins of the Modern Mind.*

Cambridge: Harvard University Press.
Duran, D. (1964), *The Aztecs: The history of the Indies of New Spain*. New York: Orion.
フロイト・ジグムント (1969)「トーテムとタブー」(西田越郎訳)『フロイト著作集　第3巻　文化・芸術論』　人文書院
Foley, R. (1987), *Another unique species: patterns in human evolutionary ecology*. Essex: Longman science & technical.
Harris, M. (1977), *Cannibals and Kings: The origins of Cultures*. New York: Random House.
マリナー・ブライアン (1993)『カニバリズム：最後のタブー』(平石律子訳) 青弓社
ミズン・スティーブン (1998)『心の先史時代』(松浦俊輔，牧野美佐緒訳) 青土社
White, T. D. (1986), Cutmarks on the Bodo cranium: A case of prehistoric defleshing. *American Journal of Physical Anthropology*,. 69: 503-509.
White, T. D. (1992), *Prehistoric Cannibalism at Mancos 5MTUMR-2346*. Princeton: Princeton University Press.
White, T. D. (2001), Once were cannibals, *Scientific American*, August: 60-65.
ウィルソン・コリン，天野哲夫，佐川一政 (1995)『狂気にあらず?!「パリ人肉事件」佐川一政の精神鑑定』第三書館

Abstract

Evolution of the mind
—psychoanalysis of the ancient cannibalism—

UZAWA Kazuhiro
Division of Social Dynamics, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia
E-mail: kuzawa@po.cc.toua-u.ac.jp

SHIMOKAWA Akio
Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia
E-mail: akios@po.cc.toua-u.ac.jp

Increasing evidence of cannibalism in fossil hominids has raised the interest of its motivation: "why did man eat man". In order to examine the issue, we attempted an interdisciplinary study between paleo-anthropology and psychoanalysis. As a result we could suggest the following: (1) in the psychology of modern cannibalism, there is an intension to assimilate with others by eating the body for their own psychological protection, (2) to examine whether the same mentality could also be applied to fossil hominids, it is necessary to investigate if they had an ability of making metaphors which is the base of psychological self-defense system. Although the first modern Homo sapience that supposed to have the same intelligence as we do appeared in history some 130,000 years ago, archaeological evidence of metaphors, such as ornaments, figurines, wall paintings and engravings, date only back to 30,000 years ago. In order to further examine the problem of time discrepancy between emergence of Homo sapience and development of advanced cognitive capabilities, it is indispensable to accumulate more information about the subsistence and the environmental resources of that time period in detail.